

資料

青年期における一般的統制感と時間的展望

——アパシー傾向との関連性——

杉 山 成¹ 神 田 信 彦²AN ANALYSIS OF RELATIONSHIP BETWEEN THE GENERAL PERCEIVED
CONTROL AND THE TIME PERSPECTIVE IN ADOLESCENTS

——In relation to apathy tendency——

Shigeru SUGIYAMA AND Nobuhiko KANDA

The purpose of the present study was to clarify the effect of the time perspective upon apathy tendency in an internal and external group of locus of control. A questionnaire of the locus of control scale (Kambara et al., 1982), experiential time perspective scale (Shirai, 1994), and apathy tendency scale (Tetsushima, 1993) were administered to 165 university students (78 males and 87 females). Multiple regression analysis was applied to the data. The main results were summarized as follows : (1) The influence of locus of control upon future time perspective (goal-directedness, hopefulness) was significant ; (2) The influence of future time perspective upon apathy tendency was significant ; (3) Between internal and external control groups of locus of control, the influence of future time perspective upon apathy tendency was found significant in only the internal group.

Key words : time perspective, locus of control, apathy-tendency.

問 題

時間的展望 (time perspective) の研究対象には、狭義の時間的展望 (time perspective : extension, density, 構成の程度等の側面)、時間的態度 (time attitude : 個人の過去・現在・未来に対する positive-negative な態度)、時間的志向性 (time orientation : 個人の思考、行動の優先的な方向性) といった種々の概念がある (Nuttin & Lens, 1985 の定義による)。Lewin (1942 ; 1951) が、個人の生活空間を、未来や過去をも含むものとしてとらえ、個人の粘り強さ、集団のモラル、およびリーダーシップなどが時間的展望のあり方に強く依存していることを指摘して以後、こうした時間的展望、特に未来展望 (future time perspec-

tive) と、適応変数やパーソナリティ変数との関連性が多くの研究によって検討されてきた。

こうした実証研究では、それぞれの操作的定義に基づいた未来展望の測度と他の測度との相関的な関連性が議論されている。しかし、これらの研究の多くでは、扱われている変数が未来展望の先行要因なのか、それとも時間的展望が現在に影響を及ぼした結果なのかという因果的な関係についてはほとんど議論されていない。そのため、こうした従来の研究では、未来展望が現在の行動や適応に影響を及ぼすメカニズムを説明しているとはいえず、上述のように未来展望と適応—不適応との関連が確認されても、未来展望研究の側から不適応への心理的援助等に対して有効な示唆を与えることは難しい。Lessing (1972) は、純粹に認知的な未来展望と、実際に行動を動機づけたり調整する未来展望を区別する必要性を主張しているが、今後の研究には、

¹ 立教大学文学研究科 (Rikkyo University)

² 白梅学園短期大学 (Shiraumegakuen College)

未来展望の現在の行動・適応への影響のプロセスという観点からの理論展開、および実証研究が急務であると考えられる。

この点に関して、杉山 (1994 ; 1995) は、未来展望概念を動機づけの EIV モデル (Vroom, 1964) のなかでとらえようとする Lens らの試み (De Volder & Lens, 1982 ; Van Calster, Lens & Nuttin, 1987) や、未来志向モデル (Raynor, 1974) を検討し、そうした現在に対する影響力を持つような未来展望 (以下「動機づけ的未来展望 (motivational future time perspective)」と呼ぶ) の確立においては、自己に対する「期待 (expectancy)」が中心的な役割を持つと考えた。そして、自己に対する期待に関わる認知的概念である統制感 (perceived control) に基づいて、動機づけ的未来展望が確立され、現在の行動・適応に影響を及ぼすという過程を推測している。

それによれば、まず、高い統制感を獲得した場合では、それに基づいて動機づけ的未来展望 (個人的未来に対するポジティブな態度、長く、かつリアリティのある未来展望など) が確立される。その場合、高い価値を持つ未来の予想図と、それへの到達経路が生活空間内に存在するために、その「未来」の獲得を目指して現在の行動が調整されるであろう。従来の研究では、人生満足感 (Lessing, 1972)、生きがい感 (都筑, 1984) など、人生全体に対する態度と未来展望との密接な関連が示されているが、特にこれらの現在の態度は、現在の即時的な統制感というよりも、それに基づいて確立された動機づけ的未来展望から直接的な影響を受けていると考えられる。

一方、統制感が低いものであった場合には、動機づけ的未来展望は確立されない。未来展望のあり方と非行との関連性は多く確認されているが (e.g., Barndt & Johnson, 1955 ; 勝俣・篠原・村上, 1982)、動機づけ的未来展望が確立されない場合には、未来展望によって現在の行動が調整されることがないため、非行のような利他的・短絡的な行動や、また、モチベーションの低下した無気力状態を導くことがあるであろう。このように、未来展望の性質と現在に対する行動調整効果は、個人の抱く統制感の状態によって異なることが推測される。

そこで本研究では、未来展望の行動調整効果と統制感の関連について検討するため、未来展望に影響を受ける心理的要因として大学生の学業に対するアパシー傾向を想定し、未来展望、およびその先行要因としての一般的統制感との関連性を検討する。アパシー傾向とは「精神病の無気力と異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこ

と (鉄島, 1993)」として定義される現代青年に特徴的な心理現象である。上に挙げた統制感と未来展望の関連から考慮すると、個人の持つ一般的統制感が未来展望に対して正の影響性を持ち、さらにその未来展望がアパシー傾向に対して抑制的効果を及ぼしていると推測される。このような未来展望とその先行要因、被影響要因との関連性をパス解析を行うことによって検討する。

また、一般的統制感の高群と低群の間においては、未来展望がアパシー傾向に対して示す抑制的効果が異なることが推測される。すなわち、(一般的統制感の高い) 内的統制群においては、動機づけ的未来展望が確立されるため、未来展望がアパシー傾向に対して負の影響を与えているが、(一般的統制感の低い) 外的統制群ではそうした傾向はみられないであろうと考えられる。そこで、内的統制群、外的統制群それぞれの未来展望のアパシー傾向へ示す影響性を検討し、このように推測される両群の差異を検討する。

方 法

被験者・調査手続 被験者は首都圏在住の大学生165名 (男性78名、女性87名) である。年齢は19才から24才であり、平均年齢は19.75才 (標準偏差0.81) である。1994年の心理学の授業中に質問紙を配布し、回答させた。

質問紙の構成 質問紙はフェイスシートと以下の3つの尺度で構成された。それぞれの尺度に対する評定は、すべて6件法 (「よく当てはまる」「かなり当てはまる」「当てはまる」「少し当てはまる」「殆ど当てはまらない」「全く当てはまらない」) で行った。

- (1) Locus of Control 尺度 本研究においては、青年に適用できる1次元のLocus of Control尺度として、鎌原・樋口・清水 (1982) による18項目から構成される尺度を使用した。得点の範囲は18から108点であり、高得点であるほど内的統制感が高いことを意味する。
- (2) 時間的展望体験尺度 時間的展望の尺度としては、白井 (1994) の時間的展望体験尺度を使用した。この尺度は、青年の時間的展望の構造を文章完成法によって分析した白井 (1989) に基づいて構成された尺度であり、一般的な時間的展望研究の分類 (たとえば, Nuttin & Lens, 1985) でいえば、時間的態度の測度に相当する。このうち、個人的未来に関する態度を測定する2尺度、目標指向性尺度 (5項目) と希望尺度 (4項目) を未来展望の尺度として使用した。また、個人的現在に対する態度を統制して未来展望の現在への影響力を確認するために、個人的現在に対する態度を測定する「現在の充

実感」尺度（5項目）も実施した。

(3) アパシー傾向測定尺度 大学生のアパシー傾向の測定には、先述のアパシー傾向の定義に基づいて構成された鉄島（1993）のアパシー傾向測定尺度を使用した。

結果の整理

項目分析 まず、Locus of Control 尺度の全18項目による Cronbach の α 係数は約0.75であった。合計得点の平均は70.28（標準偏差, 10.71）であり、男女の間には有意な差はなかった（ $t=1.41$, $df=163$, n.s.）。この Locus of Control 合計得点の分布は正規分布に近かったので、合計得点に基づいて被験者を2分し、低得点の被験者群を外的統制群（Locus of Control 得点が71点未満の82名）、高得点の被験者群を内的統制群（Locus of Control 得点が71点以上の83名）とする。

一方、時間的展望体験尺度に関しては、各下位尺度の尺度得点に素点の合計得点を項目数で除したものをあてることとして、それぞれにおける α 係数を算出したところ、目標指向性で約0.66、希望で約0.67、現在の充実感で、約0.76であった。項目の数の少なさを考慮すれば、これらは最低限の内的整合性は持つと考えられる。

アパシー傾向測定尺度31項目に対しては、全体のデータにおいて因子分析を行った。因子の固有値の落ち込み、及び因子固有値が1.0以上という2つの基準によって、3つの因子が主因子法により抽出され、バリマックス回転を施したところ、すべて鉄島（1993）の尺度構成時に得られた因子と同一のものが得られた。第1因子は「授業からの退却」、第2因子は「学業からの退却」、第3因子は「学校生活からの退却」と名付けられる。そこで、各因子を構成する項目の得点を合計して各因子に対応する尺度の下位尺度得点とした。各下位尺度得点に関して α 係数を算出したところ、第1下位尺度で約0.89、第2下位尺度で約0.84、第3下位尺度で約0.77であり、一応の内的整合性を有していると判断される。

Locus of Control, 時間的展望, アパシー傾向の関連 そして、これらの間に「Locus of Control → 未来展望 → アパシー傾向」という関連を仮定し、重回帰分析を行った（重回帰分析における変数の投入は一括投入法による）。

まず、Locus of Control 尺度を説明変数、時間的展望体験尺度の各下位尺度を基準変数とした単回帰分析（TABLE 1）においては、時間的展望体験の下位尺度へ

TABLE 1 時間的展望体験尺度の各下位尺度に対する単回帰分析の結果

説明変数\基準変数	目標指向性	希 望	現在の充実感
Locus of Control	.40**	.57**	.42**

** $p < .01$ 表内の数字は単回帰係数

のパスはいずれも有意になった。

時間的展望体験尺度を説明変数、アパシー傾向尺度を基準変数とした分析（TABLE 2）では、重相関係数はすべて有意になった。そして、アパシー傾向の3つの下位尺度それぞれの示す結果が異なり、アパシー傾向の「授業からの退却」尺度に関しては、重回帰分析における重相関係数が有意になったが、未来尺度からのパスは有意に至らず、現在尺度のみが有意な負のパスを示していた。次に、「学業からの退却」尺度では、現在尺度の他に未来尺度である目標指向性尺度からの負のパスが有意になった。「学生生活からの退却」尺度では、説明変数と基準変数の相関分析においては、2つの未来尺度とアパシー傾向の間に有意な負の関係がみられるが、重回帰分析によって現在尺度の影響力が統制された場合には、有意であったのは希望尺度からの弱い負のパスのみであった。

内的・外的統制群の比較 内的・外的統制群の差異を検討するために、まず、時間的展望体験尺度の下位尺度について、内的・外的統制群間における平均値の差の検定を行った。その結果、TABLE 3 のように、時間的体験尺度の3つの下位尺度の得点において、内的・外的統制群間に1%水準で有意な差が存在しており、現在尺度、未来尺度ともに内的統制群がポジティブな傾向を示す傾向が確認された。

次に、時間的展望とアパシー傾向との関連性の差異を検討するために、アパシー傾向測定尺度の各下位尺度得点を基準変数、時間的展望体験尺度の3つの下位

TABLE 2 アパシー傾向尺度の各下位尺度に対する重回帰分析の結果

基 準 変 数 説 明 変 数	授業からの退却		学業からの退却		学生生活からの退却	
	β	r	β	r	β	r
目標指向性	.03	-.21*	-.31**	-.32**	-.08	-.45**
希 望	-.12	-.12	.10	.12	-.23**	-.36**
現在の充実感	-.21*	-.26**	-.29**	-.32**	-.36**	-.50**
重相関係数	.28**		.41**		.56**	

** $p < .01$ * $p < .05$. β は標準偏回帰係数, r は相関係数

尺度得点を説明変数として、内的・外的統制群別に重回帰分析を行った (TABLE 4・5)。その結果、まず「授業からの退却」尺度に関しては、重回帰分析における重相関係数も、説明変数・基準変数間の相関係数も有意に至らず、その傾向は両群に共通していた。次に、「学業からの退却」尺度では両群で重相関係数が有意になったが、未来尺度の影響性については両群間に明確な差異が確認された。すなわち、内的統制群では目標指向性尺度からの負のパスが有意であったのに対し、外的統制群ではそうした傾向はみられなかった。「学生生活からの退却」尺度に関しても同様に、重相関係数が有意になったが、アパシー傾向に対する未来尺度の影響性は両群間で異なっていた。相関分析においては、

両群に共通してアパシー傾向と希望尺度との間に有意な負の関係がみられたが、重回帰分析では内的統制群の希望尺度のみが有意な負のパスを示し、外的統制群ではそうした傾向はみられなかった。

考 察

本研究においては、まず、Locus of Control、時間的展望体験尺度、そしてアパシー傾向の関連性を重回帰分析によって検討した。その結果、Locus of Control から2つの未来尺度への影響性はいずれも有意であり、現在尺度と同様に強いものであった。この結果は、一般的統制感に基づいて未来展望が確立されるという経路を示唆するものと考えられる。さらに、時間的展望体験尺度からアパシー傾向への影響性に関しては、現在尺度が与える影響に比してそれほど強い影響性ではないものの、推測通り未来尺度がアパシー傾向に負の影響を及ぼしていることが確認され、アパシー傾向という心理的変数が未来に対する認知に影響を受けていることが示唆された。このように、本研究の結果は、Locus of Control と未来展望、そしてアパシー傾向という3変数の関連を示唆するものであった。ただし、これらの関連における因果性の実証に関しては、今回の重回帰分析による検討のみでは不十分であり、今後、縦断的調査などを通して検討していく必要がある。

次に、内的統制群・外的統制群間における未来展望の差異、およびその行動調整効果の差異を検討した。まず、時間的展望体験尺度に対する平均値の差の検定を行った結果、3つの下位尺度すべてに関して両群に有意な差が見いだされた。このうち、未来に対する態度を測定する2つの尺度は、目標指向性尺度が「私には、将来の目標がある」という項目に代表されるように未来の生活設計・人生計画に対する認知的側面を測定しているのに対し、希望尺度は「私の将来には希望が持てる」というような、未来へのより感情的側面を測定する尺度である。未来に対する態度を構成するこの2つの異なった側面の両方において、内的統制群は、外的統制群に比してポジティブな傾向を示していた。Platt & Eisenman (1968) は、外的統制の個人が内的統制の個人に比して、extension(未来展望の長さ)、evaluation(未来に対する評価)などの未来展望の各側面において、よりネガティブな傾向を示すとしており、また、Thayer, Gorman, Wessman, Schmeidler & Mannucci (1975) は、時間的経験質問紙 (Wessman, 1973) を実施し、外的統制の個人が時間の連続性の認知に劣り、計画性に欠ける時間的展望を持っているという結果を得

TABLE 3 時間的展望経験尺度の各下位尺度得点の平均値の差の検定の結果

	Locus of Control の2群		t(166)
	外的統制群 (n=82)	内的統制群 (n=83)	
目標指向性	3.31(0.84)	3.98(0.90)	5.03***
希 望	4.24(0.89)	4.96(0.73)	5.68***
現在の充実感	3.55(0.98)	4.20(0.89)	4.45***

*** $p < .001$ () 内は標準偏差値

TABLE 4 アパシー傾向尺度の各下位尺度に対する重回帰分析 (外的統制群) の結果

基準変数 説明変数	授業からの退却		学業からの退却		学生生活からの退却	
	β	r	β	r	β	r
目標指向性	.09	-.01	-.23	-.22	-.19	-.38**
希 望	-.07	-.13	.25	.01	-.22	-.42**
現在の充実感	-.18	-.19	-.26*	-.22	-.23*	-.42**
重相関係数	.21		.34*		.52**	

** $p < .01$ * $p < .05$. β は標準偏回帰係数, r は相関係数

TABLE 5 アパシー傾向尺度の各下位尺度に対する重回帰分析 (内的統制群) の結果

基準変数 説明変数	授業からの退却		学業からの退却		学生生活からの退却	
	β	r	β	r	β	r
目標指向性	.02	-.06	-.31*	-.26*	.08	-.21
希 望	-.06	-.10	.19	-.08	-.29*	-.35**
現在の充実感	-.19	-.21	-.27*	-.30*	-.44**	-.49**
重相関係数	.21		.39**		.55**	

** $p < .01$ * $p < .05$. β は標準偏回帰係数, r は相関係数

ている。このように、Locus of Control の内的統制群と外的統制群の間には、未来展望の諸相における差異が報告されているが、本研究の結果もこれらの先行研究と一致するものである。

さらに、未来尺度のアパシー傾向への影響性を重回帰分析によって検討した結果、一般的統制感の高い内的統制群にのみ、アパシー傾向の第2下位尺度と第3下位尺度に対する未来尺度の有意な負の影響性が確認された。これは、内的統制群の未来展望はアパシー傾向に対して負の影響を与えているが、外的統制群ではそうした傾向はみられないとした推測と一致する。

ところで、全体での分析や内的統制群のみの分析では未来尺度がアパシー傾向に負の影響を与えていることが確認されたが、その未来尺度が、第2下位尺度では目標指向性尺度であったのに対して、第3下位尺度では希望尺度であるという違いがみられた。こうしたアパシー尺度の下位尺度と目標指向性尺度・希望尺度との関連性は、以下のように考察される。

まず、第2下位尺度「学業からの退却」に目標指向性尺度が負の影響を及ぼしている傾向には、学業の未来への道具性の認知が関係しているものと推測される。Raynor (1968) や、Raynor, Atkinson & Brown (1974) は、大学生や高校生における試験の高い成績や動機づけの強さが、それらの成績を未来の目標・成功と結び付けるか否かの関数であることを見いだしている。本研究で使った目標指向性尺度は、未来の生活設計・計画に関わる尺度であり、その得点の高いことは、将来計画や個人的な目標が明確であることを意味する。よって、その傾向が高い場合には、現在の学業に対する努力は、未来の成功のための下位目標として道具的な価値を持ち、それによって学業へのモチベーションが維持されているのであるが、目標指向性が低い場合は現在の学業の道具的な価値を認知できないために、それに対するモチベーションが維持されないであろう。また、第3下位尺度「学校生活からの退却」に対しては希望尺度が有意な影響を示した。Carver, Scheier, Weintraub (1989) は、楽観—悲観主義とストレスへの対処について、未来に対して好ましい期待を持つ楽観主義の傾向と、ストレスへの積極的な対処との結び付きを示唆しているが、本研究の結果の背景にも、こうした関連が推測される。すなわち、ポジティブな未来を抱いていることは、試験勉強のような学業に関係する日常的なストレスに対するバッファーとして機能する。そして、それによって適切なストレスへの対処が行われ、学生生活への適応が促進されるため

に、そうした領域のアパシー傾向に抑制的な効果を及ぼしているということである。一方、第1下位尺度「授業からの退却」尺度においては、未来尺度からの影響性が有意ではなかった。このアパシー傾向の下位尺度が授業への出席の状況に関する項目で構成されていることを考慮すると、これは未来展望のような個人内の安定した心理要因というよりも、もっと状況的ないし表面的な要因(たとえば授業に対する興味、出席確認の有無、アルバイトの時間との兼ね合いといった要因)に左右されているのではないかと推測される。アパシーの各下位尺度と目標指向性尺度・希望尺度との関連性は、このようにそれぞれの現在に対して果たす機能の違いを反映しているであろう。

このように本研究によって統制感と未来展望の行動調整効果との間に関連が確認されたことは、未来展望の歪みに原因を持つような不適応に関して、以下のような心理的援助の可能性を示唆する。まず、時間的展望という個人の心理的側面は、本来、自発的に確立されるものであり、他者から与えられるような性質のものではない。それゆえ、不適応への援助において、時間的展望を直接的に変容するという手法をとることは難しいと考えられる。しかし、本研究で示したモデルに従えば、現在の統制感を上昇させる技法(例えば、Dweck & Reppucci, 1973 や Dweck, 1975 で検討されている、行為と成果の随伴性認知を促進するプログラムや、水口, 1993 のコントロール・トレーニングなどの手法)が、有効な援助の手段となりうるであろう。すなわち、これらの手法により統制感を上昇させることによって、現在の行動を調整するような未来展望の自発的な確立、そしてそれに伴う不適応改善の可能性が期待されるのである。

ただしその一方で、先述のように、本研究でみられた未来尺度のアパシーへの影響力は、有意ではあるが、それほど大きいものではなかった。Van Calster, Lens & Nuttin (1987) は、勉強の個人的未来の成功に対する道具性と個人的未来に対する時間的態度の相互作用が、現在の勉強のモチベーションと関連を持つことを確認しているが、このような自己の活動の道具性認知を未来展望の認知的側面の1つとして考えれば、これは未来展望の認知的側面と価値的側面の相互作用を検討していることになるであろう。本研究においては、未来展望の態度的側面のみを検討したが、現在の行動に影響を与え得るような未来展望を考慮する場合、その機能は未来展望の1つの側面にのみ関わるのではなく、未来展望に関するいくつかの側面による「システム」的な働きに基づくのかもしれない(e.g., 杉山, 1995)。今

後はこうした未来展望の各側面の相互作用とモチベーションとの関連性についての検討を行う必要があるであろう。

引用文献

- Barndt, R.J., & Johnson, D.M. 1955 Time orientation in delinquents. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 343—345.
- Carver, C.S., Scheier, M.F., & Weintraub, J.K. 1989 Assessing coping strategies : a theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 267—283.
- De Volder, M., & Lens, W. 1982 Academic achievement and future time perspective as a cognitive-motivational concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 556—571.
- Dweck, C.S. 1975 The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 674—685.
- Dweck, C.S., & Reppucci, N.D. 1973 Learned helplessness and reinforcement responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **25**, 109—116.
- 伊藤義美 1982 達成動機づけに関する研究(III)—未来志向 future orientation における長期通路と短期通路の効果— 名古屋大学教養部紀要 (B), **26**, 151—172.
- 勝俣暎史・篠原弘章・村上みどり 1982 非行少年の時間的展望 熊本大学教育学部紀要, **31**, 267—277.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302—307.
- Lessing, E.E. 1972 Extension of personal future time perspective, age, and life satisfaction of children and adolescents. *Developmental Psychology*, **6**, 457—468.
- Lewin, K. 1942 *Time perspective and morale*. New York : Houghton Mifflin. (末永俊郎訳 1954 社会的葛藤の解決 東京創元社)
- Lewin, K. 1951 *Field theory and social science*. New York : Harper. (猪股佐登留訳 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 水口禮治(編) 1993 適応の社会心理学的心理療法 —コントロール・トレーニングの理論と技法— 駿河台出版社
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspective and motivation : Theory and research method*. Leuven : Leuven University Press / LEA.
- Platt, J.J., & Eisenman, R. 1968 Internal-external control of reinforcement, time perspective, adjustment, and anxiety. *Journal of Genetic Psychology*, **79**, 121—128.
- Raynor, J.O. 1968 Achievement motivation, grades, and instrumentality. Paper presented at the meetings of the American Psychological Association, San Francisco, September (伊藤, 1982 による).
- Raynor, J.O., Atkinson, J.W., & Brown, M. 1974 Subjective aspects of achievement motivation immediately before an examination. In J.W. Atkinson & J.O. Raynor (Eds.) *Motivation and achievement*. Washington D.C. : Winston. Pp. 155—171.
- Raynor, J.O. 1974 Future orientation in the study of achievement motivation. In J.W. Atkinson & J.O. Raynor (Eds.) *Motivation and achievement*. Washington D.C. : Winston. Pp. 121—154.
- 白井利明 1989 現代青年の時間的展望の構造 (1) —大学生と専門学校生を対象に— 大阪教育大学紀要 (第IV部門), **38**, 21—28.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **65**, 54—60.
- 杉山 成 1994 中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性 教育心理学研究, **42**, 415—420.
- 杉山 成 1995 青年期の未来展望と適応—期待理論によるアプローチ— 立教大学心理学科研究年報, **37**, 65—76.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, **41**, 200—208.
- Thayer, S., Gorman, B.S., Wessman, A.E., Schneidler, G., & Mannucci, E.G. 1975 The relationship between locus of control and temporal experience. *Journal of Genetic Psychology*, **126**, 275—279.
- 都筑 学 1984 青年の時間的展望の研究 大垣女子

短期大学研究紀要, **19**, 57—64.

Van Calster, K., Lens, W., & Nuttin, J. 1987
Affective attitude toward the personal future :
Impact on motivation in high school boys.
American Journal of Psychology, **100**, 1—13.

Vroom, V.H. 1964 *Work and Motivation*. John

Wiley and Sons. (坂下昭宣他訳 1982 仕事とモチベーション 白桃書房)

Wessman, A.E. 1973 Personality and the subjective experience of time. *Journal of Personal Assessment*, **37**, 103—114.

(1995.10.25 受稿, '96.5.18 受理)